

香川県総合防除実践指標（オリーブ）

No.	予防	判断	防除	実践項目 対象病害虫・雑草	実践ポイント	点数	チェック欄	
							実施目標	実施状況
1	○			苗木の選別	健全な無病の苗木を選別する。	1		
2	○			土作り	完熟堆肥を施用し、白紋羽病の原因となる剪定枝等の未熟な粗大有機物を使用しない。	1		
3	○		○	整枝・剪定	伝染源となる炭疽病および梢枯病の罹病枝を剪定により除去する。	1		
4	○				炭疽病と梢枯病の発病助長要因である風通し不良および日照不足等の要因となる徒長枝、密生枝、衰弱枝および下垂枝を剪定により、ていねいに取り除く。	1		
5			○	雑草対策	ハンマーナイフモア等により、化学農薬の使用によらない雑草管理対策を実施する。	1		
6		○		病害虫発生情報の確認	病害虫防除所、普及センター、JA、先進農家等有する発生情報を入手し、検討する。	1		
7		○	○	防除要否の判断	ハマキムシ類の調査を実施し、防除が必要と判断された場合に防除を実施する。	1		
8	○			炭疽病対策	窒素過多になると発生が多くなるので、適正施肥を行う。	1		
9	○		○		罹病した葉、枝、果実は除去して圃場に放置せず、早めに処分する。	1		
10	○				圃内の排水に努め、密植を避ける。	1		
11		○	○		適期防除を行う。	2		
12	○			梢枯病（新梢先端枯死症）対策	窒素過多になると発生が多くなるので、適正施肥を行う。	1		
13	○		○		罹病した枝や梢枯病（新梢先端枯死症）の梢は、伝染源となるので早めに切り取って圃外で処分する。	1		
14	○		○		梢枯病（新梢先端枯死症）の梢を切り取り後、速やかに薬剤を散布して新たな菌の侵入を防ぐ。	1		
15	○				剪定枝は伝染源となるので圃内に放置、あるいは圃の周囲に積んで放置せずに適切に処分する。	1		
16	○		○		太枝を切った後は梢枯病の伝染源となるので癒合剤を塗布する。	1		
17	○		○		炭疽病の罹病痕に梢枯病に罹病する機会が多いので、炭疽病の防除を徹底し、炭疽病が発生しにくい環境を作る。	2		
18			○	オリーブアナアキゾウムシ対策	成虫発生期に捕殺する。	1		
19			○		産卵期～ふ化期（3月下旬～11月上旬）に圃内を見回り食入部の幼虫を刺殺する。	1		
20	○				圃内を清潔にし、特に幹周辺の除草、落葉の除去を徹底する。	2		
21			○		生物農薬を使用する。	1		
22			○	ハマキムシ類対策	ハマキムシ類が寄生している葉、枝、果実は除去して圃場に放置せず、早めに処分する。	1		
23			○		生物農薬を使用する。	1		
24			○	カイガラムシ類対策	耕種防除（寄生枝の切除、たわし等でこすり落とす）	1		
25		○	○		幼虫ふ化最盛期に適期防除を行う。	1		
26		○	○	農薬の使用全般	十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる最適な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。	1		
27		○	○		当該病害虫・雑草に効果のある複数の農薬がある場合には、環境に影響の少ない農薬を選択する。	1		
28		○	○		適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。	1		
29		○	○		病害虫の発生生態を充分認識した上、発生部位に農薬がかかるよう散布する	1		
30		○		作業日誌（重）	病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等の栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1		
（重）栽培管理状況について記録することは重要な実践ポイント。					33点、30ポイント	合計点数		
						合計実践ポイント数		
						評価結果		